

の高集積域と同側であることを確認することが重要となる。非発作時 ^{18}F -FDG PET では病変部の所見は、非発作時 SPECT より明瞭で発作時 SPECT の高集積域より限局していた。この理由として、発作時 SPECT では $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO が脳内に移行するまでに、てんかん波が焦点から他部位に伝播し、高集積域が広範化することが考えられる。これまでの手術報告例での文献的考察も含め、手術時の切除範囲や放射線照射の範囲を決定するという観点では、発作時 SPECT より ^{18}F -FDG PET の役割が大きい可能性がある。以上、てんかん焦点を確定する場合、種々の機能画像を含めた総合的な検索が必要と考えられる。

11. AIDSに関連した脳悪性リンパ腫の画像診断

鎌田 憲子 鈴木 謙三 五味 達哉
寺田 一志 (都立駒込病院・放診)

AIDS 関連脳悪性リンパ腫は非 AIDS 患者のリンパ腫と異なる画像所見を示すことが多く、特に日和見感染症のひとつであるトキソプラズマ脳炎との鑑別が問題となるが、その鑑別診断における ^{201}TI シンチグラフィの有用性について検討した。対象は CT あるいは MRI で脳内に腫瘍性病変が見られ、リンパ腫あるいはトキソプラズマ脳炎の疑われた 13 例である。脳内病変については早期像と後期像の SPECT 像を作成し、病変部と対側の正常部の取り込みの比 (L/N 比) を求めた。最終臨床診断はリンパ腫が 9 例、トキソプラズマ脳炎が 4 例であったが、トキソプラズマ脳炎では L/N 比が 1.2 以下でほとんど取り込まれないものもあった。L/N 比が 2 以上のものは 4 例あったが全例リンパ腫であった。L/N 比の閾値をどこにおくかなど、いまだ検討すべき問題点も残っているが、 ^{201}TI シンチグラフィは AIDS 関連脳悪性リンパ腫の鑑別診断に有用であると思われる。

12. 全身 PET で検出された大腸ポリープ (腺腫) 症例の検討

安田 聖栄 井出 満 高木 繁治
正津 晃 (山中湖クリニック画診セ)
鈴木 豊 (東海大・放)

FDG PET は糖代謝の亢進を高感度で検出でき、が

んの診断で用いられている。われわれは全身 PET でがんのスクリーニングを試みているが、大腸に FDG の小集積が認められ、ポリープが発見される場合が見られた。そこで今回 PET で発見された大腸ポリープについて調べた。

PET で 9 症例に計 10 個のポリープが発見された。全例 FDG の異常集積として検出された。サイズは 1.2~3 cm で全例腺腫であった。このうち 3 個のポリープで腺腫内癌が認められた。腺腫内癌の有無と FDG 集積程度に差は見られなかった。一方、PET 陰性の大腸ポリープについて調べるため、便潜血陽性で、後日大腸検査を受けた症例中、ポリープが発見された 8 例の PET 画像を retrospective に見直した。これら 8 例全例で FDG の異常集積は認められなかった。これら PET 陰性ポリープは 5 mm の hyperplastic polyp が 1 例と、5~1.2 cm の腺腫が 7 例であった。

大腸腺腫は前癌病変として臨床的重要性がある。PET 検査では腸管処置の必要がないことは利点である。今回の検討から全身 PET で最小 1.2 cm の腺腫が検出できる可能性が考えられた。

13. IMP シンチグラフィが確定診断につながった鼻腔原発乏色素性悪性黒色腫の 1 症例

戸矢 和仁 富永 紳一 (浦和市立病院・放)
藤井 博史 久保 敦司 (慶應大・放)

N-isopropyl-p-[^{123}I]-iodoamphetamine (^{123}I -IMP) は、脳血流イメージング製剤として開発されたが、メラニン産生組織にも親和性を示すことが知られている。Wada らが同製剤による悪性黒色腫の描出に成功して以来、本製剤の悪性黒色腫の診断に対する有用性が報告されるようになってきた。今回、われわれは、 ^{123}I -IMP の集積が最終診断に貢献した鼻腔原発の乏色素性悪性黒色腫の 1 症例を経験したので報告する。

初回病理診断にて確定診断のつかなかった鼻腔原発の乏色素性悪性黒色腫の症例に対して、MRI、ガリウム腫瘍シンチグラフィ、 ^{123}I -IMP SPECT を施行した。MRI では悪性黒色腫と診断できなかった。また、ガリウム腫瘍シンチグラフィでは悪性リンパ腫と区別できなかった。 ^{123}I -IMP シンチグラフィでは指